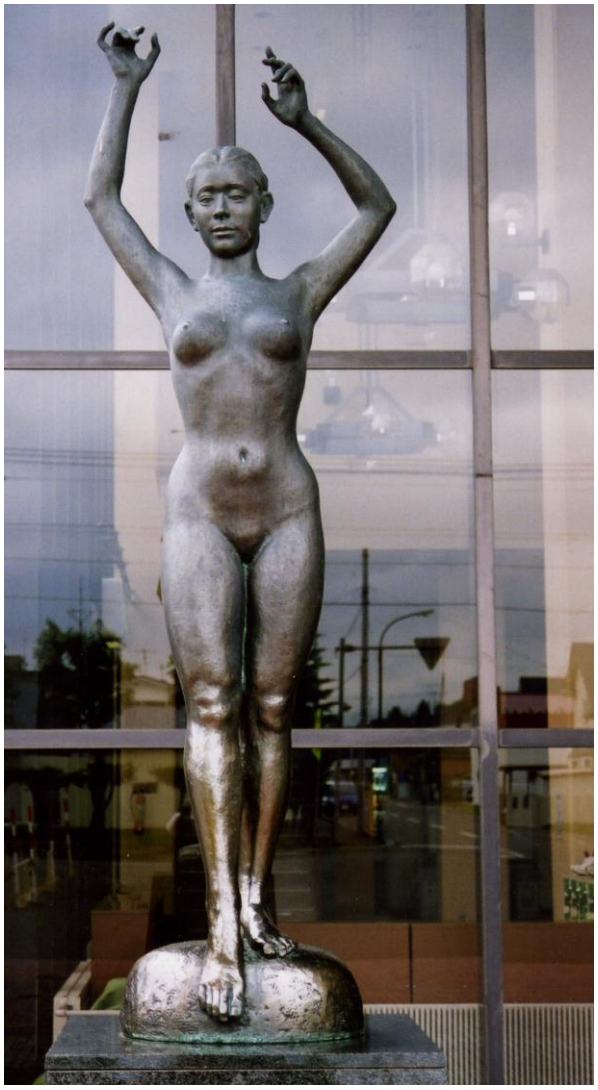
札幌彫刻美術館友の会会報

いずみ

第 18 号
2007 年 1 月 1 日発行

（題字:國松　明日香氏）

本郷新彫刻シリーズ　18



「リズム」

（十勝管内芽室町総合体育館前
1973 年制作　高さ 180 ㌢）

この像の建つ芽室町は人口 2 万人。彫刻の多い町で、駅前通りを中心に 20 作家、27 点の作品が並ぶ。その中の一つがこのリズム像である。

胸を張って両手を挙げ、右足を半歩前へ、本郷新独特のスタイルの躍動感あふれた女性像。

台座には「リズムとは生命の鼓動であり、そこから美の無限の世界が生まれる」と刻まれている。

（文・写真　仲野三郎）

目　　次

本郷新彫刻シリーズ　18　　「リズム」 …… 表紙
目次　彫刻美術館行事予定 ……2
あけましておめでとうございます　　橋本信夫会長　　川合悌一館長 ……3
「おやじの海と本郷新さん　―幻の札幌啄木像」　　好川之範 ……4
これまでの美術館　これからの美術館　　矢吹俊男 ……6
本郷新のちょっといい話　　6　　仲野三郎 ……7
芸術の秋満喫　　後志・洞爺をめぐる旅ほか ……8
抜海の目　　友の会の歩みと今後の課題 ……10
ギャラリーシリーズ　13 ……11
夕張市美術館からの報告　　上本和正 ……11
NHK でビデオ放映、新年会と講演会予告ほか ……14

札幌彫刻美術館展覧会・行事予定（1 月―3 月）

本館	記念館	散策と美術鑑賞の会	教育普及事業
平成 18 年度後期収蔵品展			
新制作展と本郷新 ―3 月 25 日まで 本郷が 1928 年に初入選した国画会から、74 歳で亡くなるまで作家活動の拠点となった新制作展に出品した作品から制作の軌跡を見る。	**素描展パート５** ―3 月 25 日まで 本郷の未公開素描展として飛行機の中から見た四国、九州の風景や鹿児島の風景を展示 **本郷新の油彩展** 1 月 10 日―3 月 25 日 30 歳代の若い頃に描いていた油彩画を紹介する。	3 月 10 日(土) ステージVI **「春雪の三角山」**	1 月 11 日（木） **子ども（小学生）造形教室** 2 月 17 日(土)、18 日(日) **造形教室（テラコッタ）**

㈶札幌彫刻美術館　札幌市中央区宮の森 4 条 12 丁目　☎011-642-5709

◇開館時間：午前 10 時―午後 4 時◇休館日：月曜日（月曜日が祝日などの場合は翌日）

◇交通機関：地下鉄東西線「西 28 丁目」駅下車　ジェーアール北海道バス「環 20」
山の手環状線 3 番乗り場、「彫刻美術館入り口」下車、徒歩 10 分

A happy new year 2007　　あけましておめでとうございます

「新たなる飛躍の年に」

札幌彫刻美術館友の会会長
橋本　信夫

明けましておめでとうございます。

当会は彫刻美術館の創設と同時に、「館の事業活動に協力しつつ彫刻芸術の鑑賞、研究を通じて教養を高めよう」との趣旨で設立され、今年度で25年になります。現在会員数は170人を超え、会の活動を支える会報「いずみ」の刊行も順調に伸びて18号に達しました。ささやかながら当会も、美術館事業を支援しながら札幌市の芸術文化活動の一端に参加し得たことはまことに喜ばしく、ひとえに会員の皆様のご理解とご協力の賜物と心から御礼申し上げます。

特に、今年度は市内の野外彫刻に汚れの目立つことから、活動の一環として「野外彫刻と街中の美を守ろう」を合言葉に、彫刻清掃マニアルのビデオ作りに着手しました。

芸術文化のシンボルとも言うべき野外彫刻がいつも美しくあるよう心がけるのは市民の責務です。次年度は市内に散在する400 余の野外彫刻について、ぬれ雑巾を片手に草の根市民による広範で持続的な清掃美化運動を展開したいと念願しています。

残念ながら札幌彫刻美術館は今年度末をもって四半世紀の幕を閉じ、札幌芸術文化財団に移管統合されることとなりました。しかし当会はその運営母体がどこであれ、従来通り事務局を彫刻美術館に置き、新美術館の支援に向けて倍旧の努力を重ねる所存ですので、会員の皆様の一層のご理解とご参加をお願い申し上げます。

「財団運営最後の年に」

財団法人札幌彫刻美術館館長
川合　悌一

友の会の会員の皆様ご家族おそろいで新年をお迎えのことと存じます。よいお年でありますよう祈念致します。

さて、皆様すでにご存知のことと思いますが、2007年3月31日をもちまして、財団法人札幌彫刻美術館は解散し、美術館の基本財産である土地、建物、作品を札幌市に寄付することに決定しました。

これを受けて札幌市議会での条例改正および監督官庁の北海道教育委員会の承認を受け、今年度が財団運営の最後の年となります。また、美術館としては開館以来 26年間の歴史に幕を下ろします。

改めて4月からは、札幌市芸術文化財団に統合され「本郷新記念札幌彫刻美術館」という新しい名称で、スタートすることになりました。

昭和56年6月29日に全館オープン以来、昨年11月までに26万人に近い多くの方々の来館を得ることができました。これもひとえに関係諸機関の方々はもちろんのこと、150 人を超える友の会の方々の大きなお力添えによるところが多いものと厚く感謝するものであります。

館と致しましては、友の会の会員の皆様方に、経過と今後の方向などにつきまして後ほど改めて文書にてご報告申し上げたいと存じます。

おやじの海と本郷新さん

―幻の札幌啄木像―

札幌市教育文化会館館長　　好川（よしかわ）　之範（ゆきのり）

作品との最初の出あい

僕の亡き父の郷里は、函館近郷の漁村である。浜言葉が、凄い。今ならキャベツをカイベツと言うだけで失笑ものだが、その村では「クゥェーベツ」と激しいイントネーションで叫ぶように喋る。下北半島の大間が望める亀田郡戸井村字小安―、ここで父は生まれた。現在、函館市域になっている。

少年時代、札幌から行く父の郷里は遠かった。やっと函館駅着。駅前からおんぼろバスに乗車して、若松町、松風町を走り抜けて、やがて大森浜あたり。磯のニオイが臭くてたまらなくなってくる。本郷新さん作の石川啄木座像は、ある年、父の実家の途中に突然にも出現した。

「アレ、何？」

「銅像だよ、タクボクっていう詩人の」

父がバスの車中で説明してくれる「タクボク」も「詩人」の意味もチンプンカンプン。しかしこの銅像は少年の僕にも印象的だった。本郷新さんの作品の中で、記憶にある最初の出あいになるはずである。

父は大森浜を大森浜などとは言わずに、「下海岸（しもかいがん）」と呼んで、懐かしんでいた。今も函館に出かけて、何度ながめても、僕の〝おやじの海〟で何事かを考え込んでいる啄木像は、磯のニオイ、父の思い出がないまぜになって無精にいとおしい。

啄木の孫をモデルに本郷さん

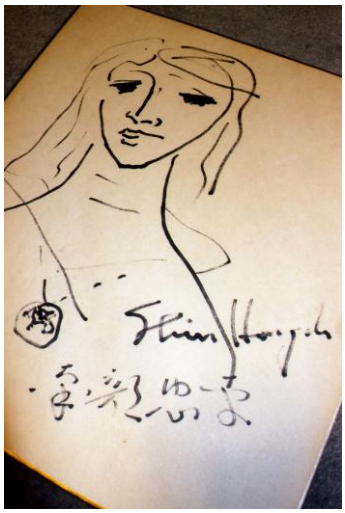
本郷さんの作品年譜をめくると、啄木座像の除幕は昭和 33 年とある。僕の小学生の頃にあたるから、先の記憶は間ちがいなかったことになる。

この像ほど函館を函館らしく喧伝（けんでん）しているものはない。戦後、歌謡界をリードしてきた作詞家の星野哲郎さんは、啄木にあこがれて函館にやってきた。その日の感激を手帳に「はるばる来たぜ」とメモし、たったの七文字はいつしか詞にふくらんで、ヒット曲「函館の女」が誕生したのだと、ご本人から聞いたことがある。きっと星野さんも啄木像を眺めたにちがいない。

近代文学における〝苦悩教〟の第一は誰か、と言えばやはり啄木であろう。本郷さんの青春も苦悩の多い青春だった。本郷さんは己が心、啄木の心、両方の苦悩する心を造形するにあたって、啄木の孫の石川玲児さんをモデルにしている。啄木に似て反権力的な思潮の玲児さんの親は、玲児＝レーニンとゴロ合わせをして名づけたと伝えられている。

啄木の幼年時代、「オデンビちゃん」（南部方言でオデコがデカい）と呼んでからかわれた。啄木生誕百年祭のとき、岩手・渋民で玲児さんと挨拶を交わしているとき、祖父啄木のヒタイに似ているのに気づき、何んともほほえましかったものである。
本郷さんの啄木像も、オデコで苦悩を表わしているのかな、と思えるほどである。

俺の郷里に俺の啄木像



好川之範氏あての本郷新ローマ字署名入り色紙

偶然だった。本郷さんとお会いしたのは、昭和 52 年 12 月 14 日のこと、場所はススキノの秋田料理店「田村」といい、今は無いらしい。そこで本郷さん、旧制北海中同級生の南部忠平さん、お二人は美酒を傾けておられた。一緒に出かけたノンフィクション作家の K 氏の仲人が南部さんというので、僕ら二人も分け入り四人して談論風発の愉快で実のある夜になっていった。

その頃の僕は、ちょうど『啄木の札幌放浪』という本の執筆に取り組もうとしていた矢先、おのずと話は興に入り啄木像になっていった。明治 40 年、詩人は函館大火の黒い焼け跡に追われて札幌入りしている。酔いに任せて、本郷さんに尋ねた。

「先生は、なぜ札幌に啄木像をおつくりにならないんでしょう？」というと、

「何ニィ―、札幌に啄木が居たってか」

本郷さんは驚いた様子。「知らない」「知らなかった」という本郷さんを、得意げに僕はひやかし通した。その夜、本郷さんは大事な決意をされ、いきなり札幌の啄木像はどの場所がいいのかとおっしゃる。啄木は駅裏の下宿屋に居たから、

「やはり駅裏ではないでしょうか」というと、

「俺の郷里札幌につくる、大通公園だ」

そう決意を言い放ち、一枚の絵を目前で書いてくれた。女性の絵である。それに本郷さん南部さんはサインしながら「これは後世、高い値になるぞ」と含み笑い。裏には啄木の一首を書きなぐった。

「潮かおる北の浜辺の砂山のかの浜なすよ今年も咲けるや」

いい夜だった。住所、電話番号、宮の森アトリエのメモをくれて、後日また会うことを約束しあって、本郷さんは南部さんを店にのこして一人、店を去った。「あいつ、またハシゴか」と笑う南部さんのひと声。間（ま）が実に良かった。本郷さんとの再会は実現することなく、他界された。無念である。

本郷新作「白樺の詩」―。これは僕の勤める札幌市教育文化会館の「どんちょう」のタイトルである。なんとも素晴らしい絵のステージ幕（原画は札幌彫刻美術館蔵）で、平成 19 年の今年、開館 30 周年の初春を迎えた。啄木の来道もまた今年、100 周年の記念すべき節目である。めでたい。

これまでの美術館、これからの美術館

小川原脩記念美術館　館長
矢吹　俊男

<少　女>
太田保子（会員・東京）

振り返ってみれば

北海道でも有数の豪雪地帯、倶知安。このマチにはこれでもか、これでもかと雪が降ります。このようなマチに美術館が出来て、８年目を迎えようとしております。

これまでいろいろな切り口で、小川原脩を知っていただくための展覧会を開き、作品を介して大勢の人たちとコミュニケーションを図ってまいりました。振り返ってみれば、小川原脩のことをしっかりとお伝えすることができたのだろうか、との思いがあります。数十回におよぶ作品の入れ替え、「これが小川原脩だ」と、気負い十分に行なった展覧会が不評だったり、小川原先生から「そんな展覧会やるもんじゃない」と言われた展覧会が意外に好評だったり、当然のことながら、お客様が求められるものには、さまざまなものがあることを思い知らされました。

ことばを紡いで作品と織りなす

美術館の仕事はいくつかの柱があって成り立つ、そのような考えを持っています。大黒柱のようにイエ（美術館）の中心的役割を担う柱は、作品の収集と公開です。それは美術館のフトコロの深さでもあります。すぐれた作品とその作品の研究があって、作品の公開が可能となります。そこで初めて作品を通して、美術館と訪れる人とのコミュニケーションが成り立ちます。作品の解説を行なっていて常々思うことですが、作品は人の心をとらえるには十分なものを持っていると。でも、そこに作者の「ことば」があればさらに、人の心をとらえ、魅きつけるのではないでしょうか。美術館の仕事のもう一本の柱、それは作者自身の「ことば」を伝えることと考えます。その時々に語った「ことば」を紡いでゆき、作品という横糸と織りなせば、魅力的な美術館になるだろうな、と思います。

さて、これからの小川原脩記念美術館は…

小川原脩が83歳の時に言った、「私は20歳代から30歳代には＜未来＞を念じていたし、すばらしい＜未来＞が必ずくるはずだと強く信じていた。年を重ねると共に、＜未来＞への思考がいつの間にか＜現在＞は如何にあるべきかに変わっていったことに気付く。その私がこの数年来＜過去＞を振り返ることが多くなっている…」こと、つまり振り返ることは、現在ある姿を直視することにつながり、未来がどうあるべきか考えることにもなります。このことを肝に銘じ、これからの美術館活動を行なってゆきたいものです。

もう一度訪れてみたい美術館、そのような美術館であり続けたい。

本郷新の　ちょっといい話　6

仲野　三郎（会員）

第 8 話　詩人だった本郷新

本郷新は出かけるときはいつもスケッチブックを携えていた。山や海で気に入った風景に出会えば、それをスケッチし、家に帰って仕上げることが多かった。

そのスケッチブックのところどころに文が書いてある。読んでみるとそれは〝詩〟とも言えるもので、未推敲だが味のある文章だ。山を越えて聞こえてくる音をリズミカルに表現した石を割る音、層雲峡を流れる清らかな流れの石狩川、釣紀行で釣り上げた大物に逃げられ、時には足を滑らして川に落ちながら読んだ空知川など、人間味があって面白い。

「石を割る音」

石を割る音がする　向こうの山の麓から　石を割る音が聞こえてくる
この淋しい峠の道　私は一人の旅人　　石を割る音が
向こうの山の麓から聞こえてくる
誰かが石を割っている　石を割る音　私の足取りに合わすように
山から山にこだまして　石を割る音が響いてくる

「リズム」の台座に入っているのは表紙で紹介したが、長万部町の平和祈念館にある「嵐の中の母子像」の台座には彫刻家の叫びとも言うべき一文がある。ゆっくり味わっていただきたい。

「嵐の中の母子像」碑文

東と西を超え
南と北を克し
天の高さと海の深さを意想する
そんな宇宙の一点に
ある日形が凝固する

形は雲を呼び
風を従え
太陽に向かって
虹よりも鮮やかに存在し存在する
これをしも彫刻というべきか

さわれ
地平を知らず国境を覚えず
人民なき帝王の如く
栄光と破滅の峰に
一人立つもの
これをしも彫刻家というべきか

芸術の秋　満喫

芸術の秋にふさわしく 10 月から 11 月にかけて友の会主催のアートツアーをはじめとした行事があった。ユニークな美術館が点在する後志ミュージアムロードと洞爺湖畔の彫刻をめぐるツアーは昨年 10 月 3、4 日の一泊二日。また、めったに見られない彫刻作品の鋳造作業を見学するアトリエ訪問は 11 月3日に行われた。さらに、野外彫刻の清掃方法を学ぶ会もあり、それぞれの体験者にリポートしてもらった。

後志・洞爺をめぐる充実の一泊二日

感動の連続だった作品鑑賞

田中　和子（会員）

「しりべしミュージアムと洞爺湖ぐるっと彫刻めぐりの旅」には 21 人が参加した。バスが NHK 前を出発し、市内を抜け、海が見え始めたころ、この日の目的地でもある岩内出身の橋本会長が話す、学生時代、バイオリンを寝袋に包んでの海岸沿線ロマン旅の思い出や橋本家と木田金次郎家との縁などを興味津々聞き入った。

昼前には共和町の西村計雄記念美術館に到着し、「山川草木」展を鑑賞する。画面に軽やかな線が走り、サインがさりげなくモチーフに溶け込んでいる。

次いで訪れた岩内の木田金次郎美術館では、道銀の初代頭取・島本融がゆかりのあった作家の作品を集めたコレクションを中心にした「島本融の眼」展が開催中。岡部卓学芸員の話を聞きながら作品鑑賞する。スポンサーの眼力とメセナへの高い意識に感動した。さらに、荒井記念美術館では庭に設置された彫刻やピカソ展を見た。

この日の美術館めぐりを終え、ホテル「グリーンパーク岩内」へ。温泉と約 2 時間の会食では笑いが広がり、和やかな交流が飛び切りのひと時となった。

2 日目はまず、倶知安の小川原脩記念美術館。近郊および札幌で活躍中の若い作家の屋外彫刻や室内展示、また、風土館で作品を鑑賞後、ニセコパノラマラインを通り洞爺湖へ。湖畔に点在する彫刻作品の解説を聞きながらの周辺 1 時間ほどの散策は穏やかな日差しを浴び、自然と一体になる心地よさだった。

中山峠を通り午後 5 時札幌到着。つつがなく全行程を終え、再会を約しての解散となった。

湖畔のアート心ゆくまで

石崎　貞子（会員）

紅葉には少し早かったが、西村計雄、木田金次郎、荒井記念館、小川原脩の各美術館、美しい湖面を背景にした洞爺湖畔の彫刻群など数多くの作品を鑑賞した。

後志地方に点在するこれらの美術館はニセコ連峰や羊蹄の山々を仰ぎ、日本海を望む雄大なロケーションの裾野にあって、田園風景がのどかに広がっていた。「自然回帰への旅、温もりと大地のにおい、風景としての建物」をポイントに違和感なく自然に同化している各美術館は、携わっている関係者の並々ならぬセンスを感じさせた。

飾られている絵は静かで穏やかなものや、

強いエネルギーに満ちているものなど、作者たちの真摯な表現があった。ことに私は小川原脩のチベット、中国、インドなどの晩年の絵に引き付けられた。かつて登山で数度訪れた国々で目にした風景や人、動物たちが描かれていたせいか、立ち去りがたい思いさえ残った。

洞爺湖を取り囲むさまざまな彫刻群は58基あるそうだが、時間の関係で見たのはその4分の1くらい。いつか泊りがけで、湖畔のアートギャラリーを心ゆくまでめぐり歩きたいとの思いを抱きながらの帰途であった。

ブロンズ鋳造技術見学会　息をのむ美しさに魅了

彫刻作品の鋳造現場を見学したのは江別市在住の道展会員、菅原尚俊さんのアトリエ。広さ60畳ほど作業場中央に溶解窯があり、奥にろうを溶かすレンガ造りの四角い窯。入り口で女性が直径25センチほどの取瓶（とりべ）という、溶けた銅を入れる口つきの容器の内側に、ねっとりした石膏のようなものを塗っていた。菅原さんを含め男性3人、女性5人で既に3つの机の上に、直径 30 センチほどの円筒形の石膏にガムテープがぐるぐる巻かれていた。マスクをした女性が石膏型についたごみをすごい空気圧で飛ばす。窯に火がつくと轟音とともに温度が上がり、40分ほどで1200度近くになる。炎が緑色になった。耐熱防備をした菅原さんが柄の長いひしゃくで浮いた不純物をコンクリートの上にすくい出す。ひしゃくで取瓶に移す時にはどろどろに溶けた銅がオレンジと緑の玉虫色に輝いて流れ落ち、息をのむほど美しかった。二人がかりで床の砂の上に移された口径6センチほどの石膏型の湯口に流し込む。あとは冷めて型をはずすのを待つだけ。夕方、一つだけ型からはずしてもらいカラスの作品と対面して帰路についた。

（田中和子・会員）

彫刻の清掃法学ぶ　彫刻家渡辺行夫氏アトリエ（銭函）で

札幌市生涯学習センターの委託で野外彫刻清掃を提言するビデオ制作に取り組んでいる橋本信夫会長ほかスタッフのメンバーが11月5日、小樽市銭函在住の彫刻家・渡辺行夫さんのアトリエを訪問して、野外彫刻の清掃方法などを取材した。

同アトリエの庭に点在するユニークな造形作品を前にして渡辺さんが橋本会長の質問に答え、撮影担当の大地淳さんがさまざまなカメラアングルでのインタビューを収めた。

渡辺さんは洞爺湖畔にある作品「風待」で第6回本郷新賞を受賞するなど道内外の公共空間に数々の作品があり、エネルギッシュな活動で知られる作家。「彫刻の清掃の基本は水洗いとブラッシング。石専用の洗剤、家庭用カビ除去剤を使っている」などと話していた。　（斎藤美年子・副会長）

抜海の目

友の会の歩みと今後の課題

「もっと自主的な友の会の運営を…」と会の組織を改める総会を開いてから5年の月日が流れようとしています。その時の総会の目的は従来の美術館のお手伝いから、主体性をもった友の会として自立し、館と友の会が車の両輪としての役割を担える会でありたいとの願いを込めたものでした。それから4年､さまざまな事業を計画し、実行に移すべく努力してきました。

ここに来て、友の会を取り巻く状況は大きく変化しました。それは一昨年3月、札幌市出資団体評価委員会から報告された、札幌彫刻美術館は芸術文化財団との統合が望ましいとの提言を市が受け入れたことです。これにより彫刻美術館は今年4月1日から芸術文化財団の一部となり、所有作品をはじめとする財産がここに移管されることに決まりました。

このようなことから、今後、友の会の活動目的も車の両輪として館を支えることから、さらに一歩、活動の視野を広げる必要があると思います。

その第一歩は札幌市内に設置されている汚れた野外彫刻の維持管理です。道都・札幌にふさわしい美観に直結するこの問題は市にとっても頭痛の種の一つではないでしょうか。

友の会がこの問題に取り組む発端は本郷新の野外彫刻 PR のためのビデオ作りにありました。作品のビデオ撮影に入りましたが、札幌駅前の牧歌像、道庁前庭の母子像、そして大通公園の泉の像など、どれも鳥の糞などにまみれて映像化できる状態ではありませんでした。

このことは昨年6月開催した友の会主催の市長との懇談会で取り上げ、市としても対策と体制作りに取り組んでいるようですが、さらに、市の了承を得て、彫刻家の指導の下に大通公園の母子像の清掃を行い、野外彫刻の清掃方法のマニュアル化を進めているところです。

このほか、彫刻家との交流を深めるためのアトリエ訪問、彫刻家を含めた芸術家による講演会、会報への寄稿依頼も積極的に行ってまいりました。さらに、道内外の彫刻をはじめとする絵画鑑賞など、数多くの美術館めぐりを通して芸術に対する感性を養う機会を重ね、現在に至っております。

このように友の会の活動も従来の館支援、会員の美の楽しみと知識の向上に加え、市民としての街づくりへの協力や作家との交流など、活動の幅を広げていく必要を感じています。

これらのことを会員相互の理解のもとに発展的に取り組み、文化の向上に役割を果たすことができればと思います。

ギャラリーシリーズ　13

ギャラリーたぴお

札幌の観光スポット・時計台近くの中通りに、郵便局の〒マークが目印の「道特会館」がある。大正 11 年、道内の特定郵便局長の宿泊施設として建てられ、貸しビルとして続いている。そのビルの 1 階に画廊主・竹田博さんの「たぴお」がある。昭和 45 年からこのビルの一室でグラフィック・デザインの仕事を始め、57 年、現在のビルに建て替えた時に、画廊もオープンした。

16 年前まで同じビルの中で６つの同業が軒を並べていたが、その多くが姿を消し、「たぴお」だけが老舗画廊の灯を点し続けている。

画廊の中に一歩足を踏み入れると、レトロ感のある空間で現代アートが迎えてくれた。壁にレールがなく、無数の釘を打ちつけた跡が四半世紀の軌跡を物語っている。竹田さん自身デザイナーであり画家であり、個展を主体に、「自分の意思でやってきたことをひとつに繋げてすべてを観てほしい」との思いを伝えながら制作を続けている。

一方、若い画家たちの発表の場として、無理のない貸しギャラリーという考えで運営され、新しい作家を世に送り続けてきた。この画廊で発表した作家名をすべて載せた小冊子を今までに３冊発行している。

「たぴお」はフィンランド語で「森の精霊」という意味。床板に置かれた木のベンチに腰かけると、街の喧騒からいっとき心を開放される心地よさがあった。

1 月 20 日まで「異型小空間展 12ｔｈ」開催中。　　（太田市子・会員）

場所：札幌市中央区北２西２、道特会館１階（チサンホテル新館斜め前）　℡011-241-6301
開館　11 時～19 時(日休)

■■「ギャラリーシリーズ」の担当は今回から太田市子さんに交代しました。■■

＝夕張市美術館からの報告＝

存続を求めながら　代替え案を模索

夕張市美術館長　　上本　和正

昨年12月に入り、財政再建団体になる夕張市の惨状が露わになってきた。ふくれあがった巨額の借金を返すための再建案は、住民生活のすべてにわたり我慢と忍耐を強いるものである。各種の公共施設はほとんど廃止、事業は休止となって、市民が集い、ふれあい、発表する場所と機会を失うことになる。

美術館も維持管理費の負担が重いがゆえ、'07年３月で閉館の止むなきにいたる。電気、暖房料はきりつめても年間400万円はかかる。負債360億円を20年で返済する夕張市にはいかんともしがたい経費なのである。夕張に限らず全国どの市町村も財政は逼迫していて、口を開けば「それにつけても金の欲しさよ」が現状だろう。交付税の大幅減が拍車をかける現在、文化どころではないということか。

開館以来27年間、郷土に密着し、夕張ゆかりの作家展や炭鉱の歴史を見据える企画展を開催してきた当館には、千点を超える所蔵品がある。産炭地ならではの歴史と風土にはぐくまれ鍛えられた画家や書家の、日々の研さんから生み出された作品群だ。閉館後どうなるか？　どうするか？　現建物に保管（電気ストップで空調なし）、市庁舎に展示室を設ける（職員大削減でスペースできる）、寄贈者への作品返却、オークション等々。

美術団体の自主運営でギャラリー使用を可能にするため、最低料金設定の電気配線に替える。暖房は無理だから5～10月の半年間。市の経費ゼロでもできるアイデアを模索中である。

大地淳さんのビデオ作品

NHK テレビで放映

会員が参加した野外彫刻清掃シーン

友の会は今年も札幌市生涯学習センターの委託で野外彫刻清掃を提言するビデオづくりを進めているが、会員の大地淳さんが撮影したビデオの一部が昨年 12 月 15 日、NHK 札幌のローカル放送で紹介された。

「『野外彫刻』の清掃」のタイトルで、 同日午後 6 時からの番組「ほくほくテレビ」の中の《ビデオ・アイ》で放映されたもので、約 1 分間の放送。

9 月 11 日、大通公園の「花の母子像」で行われた野外彫刻を清掃する会員たちの様子がナレーションとともに写し出され、汚れた部分をタワシやブラシで丁寧にはがし、水をかけて洗い落とす会員の様子が大地さんのレンズを通して全道に流れた。ビデオ制作はすでに撮影作業が終わり、近く完成する予定。

展覧会ご案内

■石垣 渉 水彩画の世界展■

▼日時　20007 年 3 月 13 日―18 日
　　10:30～19:00（最終日は 17:00）
▼会場　さいとう gallery
　　（札幌市中央区南 1 西 3、
　　ラ・ガレリア 5 階℡011-222-3698）

2007 年新年会と講演会

友の会の新年会と講演会を次の通り開催します。

■日　時：1 月 20 日（土）11:00 から
■会　場：ホテルオークラ
　　（札幌市中央区南 1 西 5）
■ 講演会：11:00 から
「美術館を支援するボランティア活動」
　講師：　木村　純　氏
（北大教授、教育機能開発センター生涯学習計画研究部門）
■新年会：12:00～14:00
■会　費：4,000 円
■申し込み：1 月 12 日までに
　斎藤美年子（☎011-643-7246）へ

おわび　前第 17 号「抜海の目」の中で「石山小学校」と表記した部分は間違いでしたので取り消します。関係者にご迷惑をおかけしました。

編集後記　▼今号冒頭の会長、館長の新年あいさつ、ともに並んでの掲載はバックナンバーを繰ってみたがこれが初めて。第 6 号（平成 16 年 1 月）で新年にからんだ原稿が載ったが、これは別々のページだった。併載まためでたし、か。▼寄稿文「おやじの海と本郷新」の執筆者、好川之範氏とは思いがけず 30 年ぶりに原稿を介しての再会。こんな秘話があったとは―さすが啄木研究家らしい一文。読ませてくれた。　（大内）

彫刻美術館友の会　会報「いずみ」№18
2007 年 1 月 1 日発行
〒064-0954　札幌市中央区宮の森 4 条 12 丁目
財団法人札幌彫刻美術館内℡・fax：011-642-5709
発行人　濱　久子
編集委員の連絡先：斎藤美年子：011-643-7246
濱　久子：011-893-5212